

## 母親の親役割受容と主体的生き方

榎田 二三子  
(武蔵野大学)

### 1. 研究目的

筆者のこれまでの調査で、子育てはつらいこともうれしいこともあるアンビバレントな感情を伴うこと、母親がつらいと感じる状況には、子育てだけではなく、自分の生き方の問題が隠されていること、これまでは母親役割を期待された子育て支援が行われていたが、母親だけでなく個としてなど複数のアイデンティティが統合され、主体的に生きることが可能な子育て支援が必要であることがわかった。<sup>1)</sup>

この段階では、主体的生き方とは何を指すのか、明確に規定しないまま主体的という言葉を使用していた。現在子どもの主体的学習などについての研究はみられるが、親の主体性や主体的生き方についての文献は、みられない。心理学分野では、アイデンティティの研究として取り上げられているが、主体的な生き方がどのようなものであるのか規定されないまま、漠然とした共通理解のもと進めているのが現状である。

本研究では、2000年に筆者が行った「母親の生活と意識に関する調査」を吉田民人の主体性理論<sup>2)</sup>を手がかりに再検討し、親役割の受容意識と母親が主体的に生きにくい状況の明確化を目的とする。

### 2. 研究方法

1) 調査方法と対象：2000年7月～8月に筆者が実施した乳幼児を家庭で育てる母親の生活と意識を把握するための質問紙による調査を使用し、検討する。対象は、埼玉県A市に住み、主として0歳から3歳の乳幼児を家庭で育てている母親である。市の保健センターの乳幼児健康相談、児童館の親子で遊ぶ会、公民館の講座、自主グループなどにおいて、調査票を配布した。調査票配布数 264、調査票回収数 182 (回収率 68.9%) うち有効回答数 178 であった。その場で記入してもらい、不可能な場合は自宅で記入後、筆者に郵送してもらう方法で回収した。対象者の属性等は、別紙 (別紙参照) のとおりである。

#### 2) 調査構成

調査構成は、①母親の生活に対する意識として「うれしかったこと」「つらいこと」「今したいこと、望んでいること」について ②子育て支援の場に参加しての意識について ③母親自身の親になって成長したり

変化したと感じている意識 (本論で取り上げる) についての質問を設定した。

③の質問項目は、小嶋の養護性の研究<sup>3)</sup>から、養護性の中心をなす「赤ん坊・子どもへの興味」など3分野から6項目取り上げた。また、若松・柏木の研究<sup>4)</sup>から「親になる」ことによる成長発達の次元から、12項目とりあげ、4段階評定を求めた。なお自由記述についての分類は、KJ法を用いて分類した。

本論では、①の「今したいこと、望んでいること」と③母親自身の親になっての意識についての調査結果を取り上げる。

### 3. 結果

#### 1) 親の成長の様子

##### A. 自分が「変わったと思う点・成長したと思う点」について

自由記述で回答を求めたところ、変わったと思う点や成長したと思う点があるものが67%、無回答、わからない、変わったと思う点や成長したと思う点がないものが合わせて33%いた。

自分が「変わったと思う点・成長したと思う点」についての自由記述を分類した結果、表1のような結果になった。

##### B. 養護性及び親になる事への成長・発達について

養護性及び親になる事への成長・発達の次元に関する問いに対しての回答結果は、表2 (別紙参照) のとおりである。「赤ん坊・子どもへの興味・関心」「自己抑制」「生きがい・存在感」「子どもを上手く扱える自信」は、80～90%の高い割合で肯定されている。それに対して、「運命・信仰・伝統の受容」は約50%、「積極的な養護的役割の受容」「柔軟さ」「視野の広がり」は60%台である。また「自己の強さ」は設問によって回答に差が大きい。

#### 2) 「今したいこと・望んでいること」について

母親に「今したいこと・望んでいること」を自由記述で尋ねたところ、したいことがある者は88%、したいことなしと考えたことなしが各1%、無回答10%あった。その内容を詳しくみると、自己実現や個としての自由、時間的余裕など、母親自身の生き方に関連する内容が60%となっている (表3別紙参照)。

表1「変わったこと成長したこと」の内容

項目		件数	%
自己関連	柔軟さ	5	34
	余裕	5	
	協調性	2	
	積極性	11	
	他者への思いやり	8	
	自己反省	5	
	価値観、生き方、多様性の受容	13	
	その他	5	
小計	54		
親関連	親役割の自覚	19	31
	子ども理解	5	
	多児への養護性	19	
	親役割への共感	7	
	小計	50	
地域社会関連	視野の広がり	21	35
	弱者の視点の獲得	12	
	地域社会との連帯	24	
	小計	57	
合計		161	100

#### 4. 考察

##### 1) 親役割の受容

母親たちは、親役割を受容しながら、主体的に生きることができているのだろうか。67%の母親が親になって変わったことや成長したことを肯定的にとらえている。一方 33%の母親はそのような感じを持たずにいることに注目しなくてはいけないだろう。

また、養護性及び親になる事への成長・発達の次元に関する問いに対しての回答で、「赤ん坊・子どもへの興味・関心」「自己抑制」「生きがい・存在感」「子どもを上手く扱える自信」は、高い割合で肯定されているのに対して、「運命・信仰・伝統の受容」「積極的な養護的役割の受容」「柔軟さ」「視野の広がり」がそれより低い。これらの項目は、親になって変わったことや成長したこととして自由記述で述べられているものと重なる内容のものであるが、親役割を受容する面がやや弱いと読みとれる。

約70%の母親が親になっての変化・成長をとらえ、同様の割合で養護性や親になることの成長・発達を感じているが、「今したいこと・望んでいること」への自由記述では、回答の60%が自分の生き方に関連するものである。個別に回答を見ると、養護性が高く、親役割を受容していても、自由な時間が欲しいと思ひ、仕事や専門学校などへ行きたいと思っている。このように親役割の受容及び親としての成長と自己実現や個としての生き方は別にとらえられている。

##### 2) 「脱当主体的主体性」を求められる親役割

子どもは、母親を自分が主体性を発揮する拠り所として育てていくため、子どもを育てる母親は、子どもの欲求に沿って生活することを強いられる部分がある。母親のつらい状況は、吉田のいう「当体的主体性」ではなく他主体によって選択することを求められる「脱当体的主体性」で過ごさねばならない毎日の生活から生じてくる。母親たちの「自分だけの時間が欲しい」という声は、当体的主体性を発揮する時空間を持ってないということでもある。

本調査の他の質問では、「風邪を引いても寝られない」「公園へ連れ出される」など母親が子どもとの関係で脱当体的主体性を取らざるを得ない状況や、親の介護や看病などにおいても脱当体的主体性の生活になっている様子が述べられている。「自分らしくいきたい」と思う母親の声は、このような現実の生活から生じている。しかし、母親たちが「親になって変わったこと成長したこと」で肯定的に挙げているものは、脱当主体的生活の中で培われたものであることも事実である。

##### 3) 子育てにおける親の主体性の複雑なあり様

鯨岡は、『母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達』の「初期母子関係における間主観性の領域」<sup>5)</sup>において、子どもとの関わりの中で、子どもからのメッセージを読みとる時、「主体としての『いま、ここ』の生き方」が母親が子どもの気持ちを間主観的に把握するときの条件になっているとし、赤ちゃんとのコミュニケーションにおける母親の主体性の必要について述べている。子育てという生活においては、脱当主体的主体性の生活を主体的に生きることが求められるという複雑さがある。

このような子育て期を主体的に生きるためには、吉田の主体性定義から読みとれる「自由発想」と「主体選択（意思決定）」を経て主体的に親役割を担うというプロセスが求められるであろう。

##### 【引用・参考文献】

- 1) 榎田二三子・諏訪きぬ 「子育て支援のあり方の再検討ー育児ストレスと育児期ストレスの視点から」『保育学研究』第40巻 第1号
- 2) 吉田民人 『主体性と所有構造の理論』 東京大学出版会 1991
- 3) 小嶋秀夫編 『乳幼児の社会的世界』 有斐閣 1989 pp.187-204
- 4) 牧野カツコ他編 『子どもの発達と父親の役割』 ミネルヴァ書房 1996 pp.63・123
- 5) 鯨岡 峻編訳著 『母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達』 ミネルヴァ書房 1989 pp.280